

令和二年十月十日発行

皇學館論叢第五十三卷第三号

抜刷

明治初期博覧会資料等に見える萬古陶工たち

—— 新たな視点から導かれた忘れられた事実 ——

岡
村
奉
一
郎

皇學館論叢 第五十三卷第三号
令和二年十月十日

明治初期博覧会資料等にみえる萬古陶工たち

—— 新たな視点から導かれた忘れられた事実 ——

岡村 奉一郎

□ 要 旨

幕末明治の三重県行政文書や万国博覧会や内国勸業博覧会等内外の博覧会報告書等関係資料に挙がる、明治期の萬古焼を支えていた陶工について、蔦莊平や谷スミをはじめとする多彩な萬古焼陶工の姿や出品作品等の評価という新しい視点から、四日市のやきものの新たな事実（現代に繋がる忘れ去られていた「経緯」）を本論では明らかにする。

□ キーワード

四日市萬古焼 明治初期万国博覧会 内国勸業博覧会 山中忠左衛門 蔦莊平

一・四日市における「萬古焼」のはじまり

四日市において所謂「萬古焼」^(一)が焼かれるようになったのはいつのことであろうか。

近年幕末明治の萬古焼の様子については朝日町所蔵の寄贈文書等資料群の解明等により大幅な見直しがなされてきている。所謂「有節萬古」の位置付けがこれまでの與五左衛門有節の天保二年開業からもう一代前の父与一郎有節の開業する文化後半頃まで大幅に遡ることとなってきたことが大きい。^(二)そして与一郎有節が始めた桑名の新萬古「有節焼」に影響を受けた陶工も明らかとなりつつあり、四日市へ萬古焼の影響（桑名からの移入）も若干見直しが必要となってきた。

四日市萬古の山中忠左衛門が本格的に焼成に成功したのは明治三年（『海藏小誌』（昭和三〇年）とされている。しかし忠左衛門の窯（山忠窯）が本格稼働したとされる明治三年以前創業の四日市の窯は、明治十四年の第二回内国勸業博覧会解説（以降明治十四解説という）の記載からも、垠山開之助開窯が安政六年、小川半助が万延元年、堀友直が文久二年であり、山中忠左衛門が事業化に成功する以前に製陶が始まっている。また今回それ以外にも谷スミは慶応二年、太田仁右衛門、茂福平藏は明治元年に開業した資料が見つかり、幕末四日市において多くの窯ができていたことが分った。そのことから通説のとおり忠左衛門だけが窯を始め、その陶技を後進の有志に教えたことによって四日市の萬古焼が始まったとは言えなくなってきた。忠左衛門の功績は「初めて四日市で窯を成功させた」ことではなく、「四日市においてやきものを産業化させた」ことであると考えられる。

二・幕末明治の萬古焼の陶工

萬古焼は、今までも日本国内において江戸後期から明治・大正に発行された蜷川式胤『観古図説』や大西林五郎『日本陶工傳』などのやきもの解説書に載るその記述により一定の評価を得ていることが分る。今回明治期国内外博覧会資料の確認と外国人収集家資料の翻訳を行った際、特に明治十年内国勸業博覧会（以降第一回内国博という）、明治十一年パリ万博等の出品等状況が三重県指定文化財『三重県行政文書』内の博覧会関係資料（以降県資料という）等により詳細が分ってきた。また国立国会図書館所蔵の各博覧会報告書等関係資料や、西尾市岩瀬文庫にある『陶窯類纂』（川崎千席編・明治十年代）及び『本朝陶磁器工傳』（編者不詳・明治二十年代）など国内外の博覧会への出品に際し調査した内容を記した資料を精査すること等により、明治期の萬古焼を支えていた陶工たちの新たな事実（忘れ去られていた現代萬古焼に繋がる「経緯」）が明らかとなった。

例を二つほど挙げてみる。まず明治九年フィラデルフィア万博においては国内の産品を出品する際、国は「事務局探集之部」を特設し自ら収集しているが、陶器で該当し収集されたのは淡路焼陶器加集三平、萬古焼陶器都莊平、同森與五左衛門、美濃焼陶器加藤五助、萬古焼陶器中山孫七、東京陶銅器七寶焼吹原正六、永楽磁器永楽善五郎、肥前三河内焼陶器（個人名なし）のみで東京、京都、淡路、美濃、唐津は各一名のところ萬古焼陶器で三人も占めていることがその一つ。

もう一つは明治十一年パリ万博には第二十小区（陶磁器）全体で県や団体、東京府下を除いて六十人出品しているが、その中で萬古陶工が二十一人を占めていることである。^(三)

その二十一人とは、井島惣助・伊藤吉兵衛・伊藤半藏・茂福平藏・高木閑齊・中山孫七・塚山開之助・小林政吉・村山幸四郎・伊達傳三郎・薮莊平・谷スミ・太田仁右衛門・森莊吉・塚田喜代松・伊達嘉助・山中忠左衛門・堀友直・山本数馬・佐藤久米造・森與五左衛門のことであるが、この陶工の内、詳細が分るものは極めて少なく、孫七、山忠、堀、森の四人くらいで、あとは名前のみ伝わるという陶工ばかりである。

三・明らかにになった四日市の陶工たち

現在萬古焼の陶工を調べるために重宝しているのは山田一生編『列伝三重県陶芸先覚志』である。その他四日市萬古については『中山源次郎覚書』、『海蔵小誌』、水谷英三『萬古 陶芸の歴史と技法』、和木康光著山本広巳編集『改訂版萬古不易四日市萬古焼の歩み』がある（以降この五の書籍を「先覚志等」という）。

これらの書籍は非常に詳しく、しかも網羅的に陶工を採録しており、萬古焼研究には欠かせないものである。しかし例えば「薮莊平」、「谷スミ」の二人について先述の本に説明のため書かれている文字数は名前三文の他は少ない。以下に明治十年代の四日市を中心に当時活躍していた陶工たちを、記録より明らかにしたこと、考察できたことをまとめてみる。^(五)

● 塚山開之助

開之助は明治十四解説に自らの開業沿革及び年歴人名を載せている。それによると弘化元年桑名に移住、父は「萬古の模造」をしていたという。弘化四年開之助は父とともに製陶、その後安政六年四日市に父と移り萬古製造とその伝習を始める。この萬古製造というのは新萬古有節焼のことと思われるが、四日市萬古の陶工の中で開之助より伝習

を受けたというものは残念ながら今のところ見当たらない。ただこのことは桑名の新萬古の技術がいろんな経緯で四日市に広まっていることが示されている。北町での開窯は『本朝陶磁器工傳』には「元治元年より当所にて自己の実験にて開業す」とされており、四日市内より四日市北町に移ったのが元治元年ともいえる。

開之助は明治十四解説の中で「明治九年（ウィーン万博は明治六年）奥大利亜博覧会へ出品シ銀牌ヲ拝受ス」という申告している。ウィーンにおいて萬古焼の受賞は「表状 陶器麵入 三重県」のみである。記録の中で授賞者氏名が不詳ではあるが「陶器麵入」が開之助の作品である可能性は高い。その後も第一回内国博に出品し「形状恰好画彩亦佳なり」とのことで花紋賞牌受賞、明治十一年パリ万博に出品^(六)、明治十一年三重県物産博覧会（以降県物産博という）に出品し受賞、明治十一年京都博覧会及び明治十四年内国勸業博覧会（以降第二回内国博という）にも出品している。

開之助は自身が作陶し、絵付は山下彦左衛門、長井重吉、近藤賢藏（桑名住）、水谷善次郎、種森善七ら画工がいたことが見える。また日本政府の依頼により日本各地の美術工芸の生産地を視察したイギリス人クリストファー・ドレッサー^(七)によると開之助は四日市の主要な陶芸家五人の一人に挙げられ、草創期の四日市には欠かせない陶芸家であつたと思われる。

● 蒔莊平

今までの萬古関係の解説には名前のみ挙げられている陶工であるが、彼ほどたくさんの方々の事実が忘れられていた人物は他にいない。蒔が資料に出てくるのは、前述の明治九年フィラデルフィア万博に事務局採集枠で出品しているところからである。そのことから明治初年頃より萬古焼のなかでは名の知れた陶工であつたと思われる。フィラデルフィア万博への出品物は「萬古砂器自製（素焼のものの滑鏽のもの） 茶器（各種） 珈琲具 水壺 香炉 筒（八個雜嵌紋）花瓶（十対木埋紋） 花盤 盆栽盆（六個） 置物（二個）」^(八)。この出品で蒔はとても高い評価を得る。長くなるが蒔の

作品の様子や当時の評価が分るので全文を挙げる。

體質ハ釉薬ヲ施サザルモノニシテ堅硬ナリ且ツ暗褐色ニシテ甚ダ粘質アリ濃褐色暗黒及ビ淡褐若クハ稍赭色ナルカ如キ異様ノ色器皆手ヲ以テ捏成シテ型造セシモノニアラス粘硬ニシテ且ツ清潔ナリ把手ハ透彫シタルモノ若干アリ又同質ノ花瓶或ハ其他ノ器品ハ有色ノ粘度二種類若クハ数種類ヲ參雜シテ造成セルアリ其體奇異ナル雜食ヲナシ殊ニ韻致アリ名ケテ斑駁器ト称ス其白色ノ要土ヲ以テ製シタル若干品透彫ノ裝飾ヲ附シ外ヨリ透見スルヲ得ヘシ茶器ハ極メテ薄シ把手ハ白色ノ珣瑯ヲ附着ス是製造家ノ從來慣用スル所ナリト

審査萬古器ノ模形精巧ナルヲ讃称ス

蒔はこの評価により萬古焼で唯一受賞している。彼の作品のこの評価により分る注目すべき三点は、型作りでない手捻製である点、二種類以上の色目の違う土を練り込んだ斑駁器（もくめがた）を得意とした点、薄さが単に薄いだけでなく光が透けてみえる点である。今実際の作品は見ることでできないが、明治十年『温知図録』（米國博覽會事務局編）に「萬古焼陶器師 三重県下蒔莊平造他八名」として図説を載せられていることから、作品がどのようなものであつたか推測できる。それは磁器質系の白い器体で、絵も繊細でどちらかというと薩摩焼のようものであつたり、練込を効果的に使用したりと一般的に考えられる萬古焼とは毛色の違う作品である。

また蒔の来歴についても別条にある森與五左衛門条に、与一郎有節の弟子であつたことも公式に記録されている。^(八)有節の萬古焼といえば木型急須と腥臙脂釉、文様は盛絵という作品が思い浮かぶが、蒔の作品は手捻、練込、木目文と与一郎有節の弟子ではあるが大分違う。そのことは『本朝陶磁器工傳』に

朝明郡小向村森與五左衛門祖先陶器ヲ製シ萬古ト称ス久シク世ニ行レ然レ然ニ製法敢テ他人ニ不傳自家ノ製品ハ慶應二年自ラ工夫シ製造ス

と話しており、有節には陶技を習ったが、それは取り立てて伝える必要がないものだったから、自分で研究して新しい技法を作ったことが記されている。

次に明治十年内国博勸業博覧会に後藤嘉三郎を画工として奎目や焼メで四点出品し「形状画彩並二完良ナリ」と花紋賞牌受賞しているが、同博覧会で山本五郎の評では、

就中蔀庄平ノ水注ノ如キハ遍體二菊花小鳥等ヲ描キ絶艶絶麗殆ト人眼ヲ眩耀ス然レドモ是レ啻二萬古ノ本色ヲ失スルノミナラス併セテ着画ノ要旨ヲ失セリ

と手厳しい。アイディアや絵の精巧さは目を引くが「萬古らしさ」がないとも見られていたようである。

それから後は明治十一年パリ万博に出品して以降、明治十二年長崎県博覧会に出品しその名を資料から消す。気になることはパリ万博の出品目録に本来本人の署名捺印のところに代印土井桂助となっている点。このような代印は山中忠左衛門の明治十一年パリ万博の際大塚熙が同じように代理で署名捺印しており、同年に亡くなった忠左衛門のうちに蔀もこの頃より体調を崩していたのかもしれない。前述の塚山と同様ドレッサーの四日市の主な陶芸家五人の内の一人であった。明治十年代に死没したか、蔀は後世に名が伝わらなかった謎の名工である。

●中山孫七

孫七は孫の源次郎が覚書『中山源次郎覚書』^(九)を残しており、比較的逸話や窯の様子が前述の二人に比べ明らかになっている。その覚書にも山中忠左衛門との関係が多く触れられ、「山忠に師事して」（水谷英三氏著）と記されたりしていることから、忠左衛門の影響は多大であると思われるが、文献資料の中で、孫七は忠左衛門とほぼ同格ぐらいの知名度や独立的な位置付けを持っているといえる。『中山源次郎覚書』によると明治六、七年に北町旧脇本陣付近で開窯し、明治九年伊勢暴動の後南川原町（末永村）に移したという。孫七も蔀同様フィラデルフィア万博にて事務局

探集の枠で森與五左衛門と共に出品している。開窯とはほぼ同時である。評価は、

一皿アリ蝦蛄及ヒ蟹ヲ以テ裝飾ス其工致殊ニ巧妙ナリ他ノ雜色器及ヒ萬古器ハ其裝飾佳ナリトス磁器ハ宜シカラ
ス価値甚タ廉ナリ

とあり、まずまずといったところだが価格が甚だ廉価であったことが挙げられる。

第一回内国博に出品し、

花瓶ノ形状正整ナリ画ハ古模様ノ蝶ヲ寫シ頗ル佳致アリ配色宜キニ適フ

と花紋賞牌を受賞している。出品した花瓶や珈琲具といった作品は自製のものの他、高木閑齊や内田（益田）佐藏の生地を使い、画工には藤原知門や中村駒吉、山口栄藏を配している。その絵に対し同博覧会委員会報告では、

羅漢ノ珈琲具ハ其画精ナルニハアラザレモ密ナリ且一組十五個ニシテ十二円七十錢トアリ廉ナリ

とも書かれている。しかし同博覧会に顧問としてかかわったゴットフリード・ワグネルは、

中島（中山）孫七カ出品ノ茶具珈琲具ノ如キ勁健ナル画風ヲ尚ヘリ其画様ヲ美瞻ニシテ頗ル陶器ノ形体ニ稱ヘリ
トス

と山忠の精細巧妙すぎるものに比べて好いという評価を与えている。その後も明治十一年パリ万博、同年県物産博及び京都博覧会等作品を出品していくが、なぜか第二回内国博には出品していない。孫七は大正三年まで生きていることから存命であるし、四日市を代表する陶工の一人としてドレッサーの主な陶芸家五人にも入っている。もしかすると明治十一年に山中忠左衛門が亡くなったことが表舞台からの退場に大きく関係しているのかもしれない。

●山中忠左衛門

忠左衛門は嘉永六（一八五三）年四日市末永で開窯した。^①ドレッサーは四日市の主な陶芸家五人の中の第一人者と

明治初期博覧会資料等にみえる萬古陶工たち（岡村）

して忠左衛門を挙げている。その評価は手捻で非常に薄くつくられ素焼で外側からの光が透ける土瓶と狸摘みの豆急須によるものである。これらを作ったのは小川半助ではないかと思われる。忠左衛門の窯には半助をはじめ伊藤庄藏、高木閑齊、渡辺自然齋、益田佐藏ら生地師と大塚熙、三島武、西村春政、田中桑吉、鈴木大藏ら画工といった四日市萬古の名工たちが名を連ねていた。このことが「第一人者」であることを裏付けているといえる。このドレッサーに同行しドレッサーの言動を記録していた石田為武は、全く違う評価をしている。主な萬古陶工に四日市では中山孫七・山中忠左衛門・蒨莊平の三人、小向村の森與五左衛門（有節）をあげ、四日市の陶工の作品について雑器であるとして輸出に向かないという反面、有節についてはイギリスにおいても「倫敦ノ売買ニ於テ賞譽アルベシ」と絶賛している。こうした評価をドレッサーは自著ではしていない。特に有節の腥膻脂釉については「歡迎されないピンク」と言っている。^(十一)当時の萬古焼に関する評価は日本人と外国人では全く違ったものであった可能性がある。^(十二)

博覧会出品については『四日市の文化財』（昭和二十九年・四日市市教育委員会）によると忠左衛門は明治二年シカゴ万博に出品入賞しているとのことだが、記述自体が誤りである可能性が高い。海外の博覧会出品は明治十一年年パリ万博には出品していることは確かである。そのパリ万博で名誉賞状と明治十四解説にあるも、授賞人名中に確認できなかった（註六参照）。また博覧会での忠左衛門の評価も概ね能く、明治十年内国博覧会では、

山中忠左衛門鶉ノ皿及森與五左衛門赤手ノ珈琲器ハ愛スベシ多数ノ出品概シテ清良ナリ製形描画共ニ佳適ス老熟ノ技ナルヲ鑒ル其湯灌急須ニ一種ノ斑駁ヲナラシタルハ甚佳ナリ

とされ鳳紋賞牌を受賞している。ただ同博覧会顧問のワグネルの評は芳しくなく、

列品中画樣裝飾頗ル精巧ナルモノニ乏シカラスト雖モ特ニ山中忠左衛門カ出品ノ如キハ其画樣実ニ精細巧妙ナリト謂フヘシ然レドモ獨リ疑フ其模様太々細微ニ過キ且ツ極メテ細密ナルニ非レドモ仔細ニ其画樣ヲ熟看セント欲

セハ必ス接近シテ審視セザルベカラス是レ恐クハ陶画ノ主意ヲ失ス

と精巧すぎる絵付に対し苦言を呈されている。

忠左衛門は明治十一年に亡くなり、前述バリ万博と同年の県物産博に出品し受賞したのが最後になってしまふ。その後忠七が跡を継いで、二代目忠左衛門となるのであるが、彼も第二回内国博に出品しており、

花瓶ノ透彫雅致アリ紋様モ亦俗ナラス産額ノ多キハ平素能ク業ヲ勉ルニ由ル頗ル嘉ス可シ

と褒状を授かり、父の名を辱めない働きをしている。しかしそれ以降の博覧会ではあまり出品しておらず、この様子は森與五左衛門が亡くなったあとの勘三郎有節と同様である。

●堀友直

通説によると伊勢長島藩士の出、はじめ長島の自宅に窯を築き、有節や佐藤久米造の萬古陶法を研究（久米造の弟子）していたとされるが、堀友直が自ら申告した明治十四解説によると長島藩にて若年より陶器製造を好み、工夫を凝らして邸内に小窯を築いて試しに焼いたが「素ヨリ師ニ就テ学ヒタリニモアラズ獨考ナルヲ以テ」と、有節や久米造との直接的関係がなかったことを明言している。明治六年に「長島ノ如キ僻地ナルヲ以テ」阿倉川村に移した。資料の中にはドレッサーが挙げた四日市の主要な陶芸家五人のうちの一人として出てくる（註七参照）。第一回内国博に出品に際しては、伊藤嘉太郎、増田佐藏（益田）と共同制作にて十三点出品。それらは手捻、杢目、蓮形等多種多様の作品である。同博覧会委員会報告で、

堀友直鷹ノ平皿及荷葉ノ珈琲碗ヲ佳トス若シ此鷹ノ絵ノ如キ平皿ニ山中忠左衛門ノ画工近藤賢藏ヲシテ鶉ヲ描カシメタレバ更ニ妙ナラント思フ

と評され、鳳紋賞牌を受賞し、

各器端雅錯出シ意匠ノ凡ナラザルヲ見ル価較貴シト雖ト荷葉ノ珈琲器柘榴ノ水注大水鉢及飛鷹ヲ画キタル皿等稍
進歩ノ効アリ

と萬古陶工の中でも優秀な成績を残している。その後も明治十一年パリ万博出品（註六参照）、同年県物産博に出品し受賞、同年京都博覧会、明治十二年長崎、岡山、堺、筑波の県主催の博覧会に萬古焼の代表として河村又助と共に出品、第二回内国博には自製の他、益田佐藏、辻達次郎、伊藤喜太郎の生地を使い、画工は前田友吉や息子の堀銀吾を用いて製造出品している。

また多作であつたこと、作品の造形が奇抜で面白いものも多かったため、比較的作品の傾向等が分る方である。堀の「獨考ナルヲ以テ」の陶法の系統を推し量るものとして、堀友直の窯（堀窯）で焼かれたことで有名なものは鶉型急須や面土瓶が挙げられる。鶉型急須などの動物造形は萬古では珍しい外型の型作りで有節焼的というより京焼的な側面を持つ。また面土瓶も切嵌形式ではあるが切嵌めに用いられた「パネル」が七福神や達磨、乃木希典などの似顔絵造形という有節の萬古焼とはあまり見られない成型法である。また桑名の萬古焼で著名な布山由太郎や水谷孫三郎のようなたたみ作りの急須が堀窯では作られており、技術的系統は桑名の萬古焼を独自の工夫で伸長させたものように思われる。堀友直は萬古焼の販路拡大と外国等需要に応じた製品の生産に才能を発揮し、四日市萬古焼業界の地位向上にも尽力した逸材であつたといえる。

●河村又助

彼は三重郡小古曾村の出、天保十四（一八四三）年生まれ。明治初年四日市港への汽船航路開通や港の整備を受けて、従来からの陸路とともに四日市が交通の要衝をなつていった時代、年々供給量が増える生産された製品の販路拡大のため、萬古業界は葉種行商で信用と実績を持つ又助を担ぎ出したとされる。又助は業界と協議を重ね明治八

(一八七五) 年萬古陶器問屋を開業し、窯元の製品を一手に受けて販路を開拓し、巧みな宣伝もあつて萬古焼発展の原動力となった。自らの願書や請書等の署名は全て「河村又助」であることから姓は「河村」が正しいと思われる。又助は明治十一年頃よりの博覧会(パリ万博は除く)の常連となり殆ど三重県より出品されるものに関わっている。また零細の窯を纏めて行っているようで谷スミや塚田喜代松の窯を統合していった可能性がある。

第二回内国勸業博覧会で褒状を受け、その評に、

多数ノ出品既ニ皆可ナリ其価廉ナラザルモ販額ノ他ニ超越スルハ勉励ノ效ヲ見ルニ足ル頗ル嘉ス可シ

とある。しかし同博覧会の審査を行った山本五郎は、

河村又助ノ鈕ト足トニ双翼アル人物ヲ附シタル壺及ヒ把耳ノ内ニ捲キタル花瓶ノ如キハ殆ト人ヲシテ嘔氣ヲ發セ

シム

ととても悪意のある言い方でこき落とされている。とても好き嫌いの激しく出てしまふ、強烈なインパクトのある作品であつたのだらう。^(十三)その後の主な受賞は明治二十三年パリ万博にて銅賞、明治二十四年内国勸業博覧会(以降第三回内国博という)で有功三等賞を受けている。

●土井桂助(土居佳介・土井慶助)

蜷川式胤『観古図説』において明治四年に四日市南丁「土居佳介」が製作した蓮形煙草指が記載されている。またエドワード・S・モースの『日本陶器目録』^(十四)に「カスケ」の項があり、「観古図説」と同様の煙草指が記載されており、一八六五(慶応元)年に手製の萬古焼を作陶し始めたモースは記述している。この両者は同一人物を指すものと考えられる。ただモースは「カスケ」項にパリ万博にも出品されたとも記述、「日出野」印が同煙草指に押印されていることも記している。「カスケ」という名で名の知れた萬古陶工は「伊達嘉助」^(十五)がいるが、慶應元年では二十歳頃と

かなり若い。筆者は当初モースの「カスケ」は伊達嘉助と考えていたが、土井桂助と訂正しておく。桂助は土井吉蔵（孤山焼創始者）の弟で天保十年生まれとされ、慶應元年で二十七歳、明治四年で三十三歳である。桂助は後に四日市にて萬古窯に従事し、桂助の長子與一が陶業を継いだとされているが、^(十六)四日市萬古焼の中であまり詳らかになっていない。兄とは一回り程年が離れており、吉蔵が有節焼の与一郎の下修行していた関係から、桂助も有節焼の作陶に関係していたと思われる。また桂助は与一郎有節の弟子蔀莊平と関係も深い。パリ万博の関係書類に理由は不明ながら蔀の代わりの代印署名をしている。それだけでなく『温知図録』に「萬古陶器師蔀莊平」のデザインの中に前述の蓮形煙草指の図が掲載されている。

最初に資料で土井桂助が見えるのは第一回内国博出品目録の中に「比丘尼町五井桂助」として東京の陶器商新井熊次郎出品作品の製造人として出てくる。作品は地球形手炊火鉢という変わったもので絵付は内田又造が施している。この作品は河村又助の窯で製作したと思われる、後に明治十一年京都博覧会に河村又助出品（製造人土井桂助、画工上薦幸山）で同じものが出品されている。先に挙げた蓮形煙草指といい、他人が思いつかないような造形的に少し特異なものを作る傾向にあったのかもしれない。

● 太田仁右衛門

第一回内国博に出品者として山中忠左衛門らとともに名の上がる浜一色村の陶工。しかし彼もあまり素性は知られていない。自製のものとは益田佐藏の生地を使い、後藤喜三郎や近藤賢藏を画工として製作、三点出品し、

襷状菊形の湯沸し豆釉の盒盆は形状画様尋常ならず。可価廉なり。

ということで花紋賞牌を受けている。同博覧会でワグネルも、

其能ク之ヲ改良スルヲ得ルハ太田仁右衛門カ出品ノ菓盤ニ其質甚タ精好ニシテ裏面ノ器上ニ氷裂アルモノアリシ

ヲ以テ推知スヘシ

と精巧な作品に賞賛を贈っている。オーガスタス・W・フランクス『日本の陶器』^(十七)には太田（オオタ・ジウエモンと表記）の作品が三点印影と共に掲載されており、赤土（茶色い素焼…磁器質）で型や手捻で「太田造」という印を押印し作陶していたことが分る。

他には明治十一年パリ万博出品、同年県物産博にて受賞、『本朝陶磁器工傳』においては浜一色村で「明治元年より自己の実験にて開業す」と記載されている。このような業績がありながらも、明治十一年以降目立った動きが見えず、第二回内国博にも出品せず姿を消してしまっている。

●茂福平藏

彼も太田仁右衛門と同様第一回内国博に出品し受賞している。生地は自製で絵を長谷川治兵に描かせて八点出品している。太田同様花紋賞牌を受けており、「形状正整画様細微なり」との評を受けている。作品の詳細や印銘については不明。四日市北町に住む。その後明治十一年パリ万博（住所四日市中町）、同年県物産博に出品しているが、太田同様それ以降の動向が分らない。また『本朝陶磁器工傳』の中で、名前の表記は「茂橋平藏」となっているが、

明治元年末永村故千葉礼三に就きて伝習

と平藏の師匠の名が記載されている。この千葉礼三という人もあまり詳しくは伝わっていないが、『茶譜茶話聞書空也堂来由』（前田了伯）のなかに、「四日市駅の人医師千葉伶三、木目焼始める（美濃一ノ倉木目焼）」とある千葉と同一の人と思われる。「木目」は明治初頭の新萬古の特徴の一つであり、この千葉が発明したのか確かなことは分らないが、平藏自身の身上として伝わっている事実は確かである。

●谷スミ・谷彌八

谷スミは「谷寿美女」等表記されることもある女性の萬古陶工である。明治十一年パリ万博で参加した二十二人（森與五左衛門や薮莊平等も入っている）の中で唯一作品「萬古茶瓶」にて銅牌を受賞しているが、陶工をしていたかどうかも含め謎に包まれていた。しかし今回『本朝陶磁器工傳』によると「慶應二年より浜一色村森庄吉に伝習」と記載されていることから、自身も陶工として作陶していたことが分った。

パリ万博で受賞した作品は三点全て「磁 白色六角急須」で二点は木目を使用していたことが分る。また第一回国博出品に際し、同居している谷彌八が生地製造、画工は鈴木大藏を使って六角型急須や夏目形の作品を出品している。この博覧会でも花紋賞牌を受賞しており、

製造画様稍尋常ニ超ユ釉色頗ル佳適ス其価貴カラス

との評を得ている。ただ明治十一年県物産博には出品し受賞しているが、それ以降資料から姿を消し、親族の彌八は河村又助の出品作品の製造人として名を連ねることになることから、この頃引退をしたのかもしれない。

●高木閑齊

第一回内国博には山中忠左衛門や山中孫七の生地師として見える。しかし明治十一年パリ万博には独立した出品人として山中たちと同等に参加した。そして同博覧会で「萬古湯沸」^(十八)（赤色環手蟹透模様急須）が、日本国中の多くの作品の中で萬古陶工からは森與五左衛門と二人褒状^(十九)を受ける。が、その明治十三年十二月に褒状を受け取った請書を出したのが「相続人」高木勇となっていることから、この時まで死没してしまったことが分る。

●益田佐藏（増田佐藏・内田佐藏）

佐藏に関しても、その豊かで確実な技量を示す逸話がいくつも伝わる陶工である。忠左衛門との関係が非常に大き

く取り上げられているが、資料に出てくる佐藏は生地師として様々な窯に生地を提供していることが分る。

まず第一回内国博においては、堀窯で「木目茶壺」の共同製造人、太田仁右衛門に生地提供、山中忠左衛門には小川半助に次いで六点生地を製造し、中山孫七にも一点生地師として名を連ねている（山忠窯と孫七窯では内田姓）。また第二回内国博では山中忠左衛門と堀友直の出品に際し製造人として両方ともに記載されている（ここでは両方とも増田姓）。生地師として各窯に生地を卸す際に自らの印銘等を記載することがなかったといわれ職人気質が高かったと思われる。ただ晩年第三回内国博には生地師としてではなく出品人「益田佐藏」として準備をしていたと思われるが、明治二十二年に惜しくも鬼籍に入り、三重県に出品取り下げを行った記録が残っている。

●伊藤庄藏

四日市比丘尼町に住む。木型作りの細密な技巧は第一人者として定評がある。彼は八角形の木型を使うことが多く、多作で遺作も多く伝わっている。「庄造」ともいわれるが印銘に使われて本名と間違っただけで、庄藏が正しい。一貫して山忠窯に生地を入れている。記録では第二回内国博で桑名遠次郎の製造人にもなっているが、伊藤ではなく伊東と別字を使っている。八角の型は有節萬古にあまり見られず、庄藏の工夫によるものと思われる。

●鈴木大藏

大藏は代造、太藏とも記載される。阿倉川村に住む画工。第一回内国博には山忠窯と谷スミの工房に画師として参加したことが見える。描いたとされる絵は「草花画」「松に鷹画」「花鳥画」と庄藏や半助、佐藏の作品に施し、いずれも賞を受けている。第二回内国博の時は谷工房が無くなったためか山忠窯のみ名を連ねている。

●大塚熙

大塚熙は第一回内国博及び明治十一年京都博覧会の山中忠左衛門出品作品の画工として見える。彼がどのような活

躍をしたか全く分らないが、彼の変わった資料への登場は明治十一年パリ万博の關係資料の中で、忠左衛門褒状の請書に代書署名していることである。そこから忠左衛門の使っていた職人の中である程度の位置にいた人物ではないかと推測される。また明治十一年県物産博においては自身が出品人として一点「茶壺」を出品もしている。『陶窯類纂』における「現今萬古焼ノ工人」にも「大塚幸太郎 大矢村」の次条に「同熙 同」と記載されている。大矢村は大矢知のことか。幸太郎との關係は不明であるが親族であろう。

●小川半助（圓相舎）

四日市萬古名人「三助」（他に山本利助、伊藤豊助）として伝わり、陶芸のきっかけは目の見えない無眼楽の作品をみて奮起したとか、山中忠左衛門や三助の一人利助に勧められたと言われている。明治十四解説によると、長谷川種七の下で三年間修行し、種七業死後独学にて工夫、万延年中に開業し、慶應二年に型作りや手捻の工夫を加え、その後斑文を發明したと述している。名人「三助」の一人ではあるが、他の二人とは違い、早くから独立的に工房を立ち上げていたと考えられ、第一回内国博には山忠出品中十二点の生地師として名を残す以外に、東京の陶器商藤代喜兵衛出品中にも「圓相舎半助（三ツ谷村）」として「丸形金色高砂浦景急須」が入っている。

その後明治十一年県物産博には自身が出品人として一点出品、同年京都博覧会には山忠生地師、明治十二年京都博覧会では東京の萬古陶器卸商の丸與三郎出品の製造人、明治十三年三重県博覧会では自身出品し褒状を受けている。前述の第二回内国博では自身出品人として作品を出す以外に、山忠窯、河村又助出品の生地師としても活躍し、明治初頭の四日市における優れた陶工であったことが分る。

またモース『日本陶器目録』のなかでは、森與五左衛門有節や与兵衛千秋、カスケ、朝比奈為之丞とともに項を設けて紹介されている。目録には二点掲載されており、いずれの作品も手書きで「圓相舎」と署名してある。四日市を

代表する陶工として、この「伊勢のやきもの」の中に有節らと同じく項目がある一つの原因としてモースが実際に半助にあっていことが挙げられる。明治十五年七月から八月にかけて陶器収集のため日本美術収集家で有名なウィリアム・S・ビゲローらと共に、モースは東京から京都、山口県岩国まで旅行するのであるが、この際わざわざ四日市に萬古を見に行っている。東海道を上る旅程の中で唯一「如何にして手づくりの萬古がつけられるかを見出すべく」一旦通り過ぎた四日市に引き返し「有名な半助に」会って話を聞いている。半助にしか会えなかったのかどうかは不明であるが、ただ一人萬古焼陶工で会って話を聞いているのである。^(十九)またこのように特別名前まで挙げて面会した記録が残っている例は、京都の有名な陶工ら以外にない。

また手捻名工「三助」の中で最も遺作が多い。その作品はモースだけでなくイギリス人日本美術収集家ジェームズ・ロード・ボウズの許にも「大扶桑國泗水陶師圓相舎製」の銘を持つ急須が見えている。^(二十)薄く硬く手指でもって作られていたことよって国内外の評価を集めていた当時の四日市萬古のなかで、半助は幅広く活躍した代表的な陶工であつたといえる。

●三島武

彼は第一回内国博に山忠作品の画工として見える。明治十一年京都博覧会では小川半助、忠左衛門の作品の画工、第二回内国博では山忠窯と河村又助作人の画工として記載されている。彼は早くから画工として活躍していたようであるが作品に初期の画工の多くもそうであるが銘印等入れなかったため、どのような絵を描いたかが分からないが、一例として博覧会出品作品の絵付を挙げておくと、「松に鶴画」「千羽鶴画」(半助生地)、「花丸画」(高木閑齊生地)以上第一回内国博)、「草花画」(半助生地)、「花鳥画」「ウツ入金ノ龍画」(忠左衛門生地)、「五鶴之画」(庄藏生地)以上明治十一年京都博覧会)とあり、鶴の盛絵が得意であつたように推測できる。

● 渡辺自然齋（蓮隠居）

美濃大垣藩士であったが明治維新後四日市にやってきたといわれる。山忠窯で作陶し、得意な蓮の絵を生かした作品を残し遺品は極めて少ない。彼も詳細は不明であるが名前だけは有名である陶工の一人である。資料には第一回内国博に山忠窯の生地師として出てくる。もう一か所明治十一年京都博覧会において東京萬古陶商丸與三郎の出品の中に「ヒネリ蓮葉形 勢州自然庵」という急須が出品されている。

● 内田又造

内田又造は上島庄助の子といわれ東阿倉川（楽只窯・海蔵庵窯）で絵付をしていたことが伝わっている。しかし上島庄助の孫で又造の子内田松山によると又造（又藏）は庄助の男がなく、長女の婿となっている。^(二十一) 彼は第一回内国博においては東京の陶器商新井熊次郎出品の画工として「内田華山」の名で資料に出てくる。この作品は河村又輔（又助のこと）と五井桂助（土井の誤り）との合作で褒状を受けており、

勢州製ニシテ奇巧新案ノ器ナリ脚状相陋ハス宜ク他物ニ換ヘ房室ノ飾具トナスベシ出品ノ注意ハ嘉スベシとの評を得ている。明治十一年京都博覧会では丸與三郎の出品中「上寫幸山」として名前が出てくる。第二回内国博では「内田又造」として河村又助の製造人として載っており、海蔵庵窯閉窯のあと河村又助の許で作画をしていたと思われる。

● 寺村秀之助

彼も現在ほとんど無名のような状態になってしまっている四日市の陶工である。しかし『陶窯類纂』において「現今萬古焼ノ工人」に名前（住所は日永村）が挙げられ、明治十一年県物産博に「梅形急須」一点ではあるが、半助、山本利助と共に出品（半助、利助も一点出品）している。同年京都博覧会には河村又助の出品作品の製造人として四点

名前が挙がっており、作品は「蓮浮模様彩色湯沸」などで「浮模様」を得意としたようである。日永村出身という陶工としては稀な経歴から、改名や通称等の使用による他の職工との関係は明らかにできる可能性が高いが、今のところ日永村の職工は彼以外にいない。

●山本利助

四日市川原町に生まれ、家業は陶器屋であったが、自らも手捻で作品（号萬里軒）を作ったとされている。また京都の文人画家とも親しく、書画もよくしたとされ、人物造形が得意であったとも伝わっているが、彼自身の作品が極めて少なく、その中で人形などは伝わっているものが無い。資料の中に出てくる利助は明治十一年県物産博に「墨絵山水ノ花瓶」を出品し褒状を受けている。また『陶窯類纂』には「現今萬古焼ノ工人」として「山本利助 浜町」と載っている。しかし名人「三助」の他の二人が第二回内国博に製造人等で記載されているにもかかわらず利助は載っていない。

●藤井元七

彼も資料の残り方が断片的で、活動時期不詳の人物であった。共通しているのは「上島庄助の窯が廃された後、その工人を使って羽津の地に窯を築いて『ひでの』の印を捺した作品を作った」というものである。元七は慶應年間は桑名藩内で陶工と認められおり、また『明治六年地誌提要材料編』に萬古陶器（朝明郡小向村等製）と併記された志氏野陶器（三重郡四日市等製）に当たるのが元七の窯であることも間違いないとされている。^(二十一) そのことから慶應年間までに元七は海蔵庵窯（阿倉川）に影響を受け、隣村の羽津にて作陶していたことが考えられ、海蔵庵窯閉窯後、工人等引き取って（海蔵庵窯趾碑文にある）、桑名の新萬古系と違う信楽系のやきものを作っていたと言えよう。^(二十三) そうすると堀友直が四日市に窯を移す際「元七の窯」を使って試作したが、意に添わなかったため改めて三ツ谷に窯を新

築いたということも、信楽系の窯（海蔵庵窯）ではなく、楽・京焼系の窯（有節窯）が肌に合ったからといえるだろう。元七が博覧会に出てくるのは明治十二年京都博覧会で丸與三郎出品の萬古陶に「棗形牧童急須」の製造人（画工石田玉山（東京絵師かどうか不明））として、また第三回内国博に出品者しているのが見える。

四・陶工から見る萬古焼の実相

以上みてきたように、明治十年代活躍した萬古焼の陶工は、多種多様非常に多く、その技術や工夫において高い評価を得ていたことが分る。

明治初期、欧米先進各国に陶磁器をはじめとする美術工芸によって、日本という国を万博という舞台で発信し、大いに関心を持たれジャポニズムの流行が生まれる。世界に影響を与えた日本の美術工芸の中でも「伊勢のやきもの萬古焼」は、日本国内の森有節（腥臑脂釉や大和絵による盛絵）とは別に、本論に示した様々な陶工の工夫された作品が嗜好の対象（手捻、木目、切嵌）となり海外で売れていった。その後もそれに続く人々が新たな需要を生み出し四日市は日本でも有数のやきもの産地となった。

今回まとめた明治十年代の県資料及び博覧会関係資料の記述は、前述の本にはない情報が多々含まれている。この情報は新萬古として、明治維新から第二次世界大戦敗戦からの復興までの動乱の世紀を生き抜く際、忘れられ、失った記憶が奇跡に残った一部といえる。それは裏を返せば、頭初に挙げた「先覚志等」が、明治の実際の風景を体験した人たちが昭和後期の資料に残っていない、当時の人々の声や記録を収集した貴重なものともいえる。

現代に続く歴史は「経緯」が一つ欠けても成り立たないものだが、歴史上の事実是不断の努力がないと忘れ去られ

てしまふ。明治の初頭、京焼や薩摩焼、肥前、尾張のやきものに伍し、伊勢のやきものとして国内外に名を轟かせた萬古焼があったということも、今に繋がる一つの、しかも大きな「経緯」である。

今産業として成り立つ礎となった人々の事象が少しでも明らかになることで、萬古焼の真の姿が顕れる。そのために今後も資料研究がなされ、語り継がれていかななくてはならない。

註

一 萬古焼の全般的な通説は水谷英三『萬古 陶芸の歴史と技法』、満岡忠成『四日市萬古焼史』、「萬古」という名称についての考え方は岡村『萬古の称と印銘について』（三重県史研究第二十三号）を参照とすること。

二 井上喜久男『神宮徴古館所蔵萬古焼について』（瑞垣第二四一号）及び岡村『幕末明治期の桑名の萬古陶工』（桑名市博物館紀要第十四号）参照。

三 陶工の多い順では萬古二十一人の次に愛知十六人、京都十一人、岐阜四人、石川三人、兵庫二人、神奈川・鹿児島・和歌山各一人となっている。

四 イギリス人で大英博物館学芸員のオーガスタス・W・フランクス（Augustus W. Franks）の著書『Japanese Pottery』（訳題『日本の陶器』・一八八〇）には明治十一年バリ万博に出品した日本の陶工七十八人の名前が挙がっており萬古は十九人を占める。内訳には伊藤吉兵衛と小林政吉が抜けている。また明治十一年バリ万国博覧会関連県資料では三重県からの出品は二十二人で加藤長次郎（四日市久六町）も出品しているが、彼は正式な出品目録（『明治期万国博覧会美術品出品目録』（平成九年）参照）に名がない。

五 四日市の陶工についてまとめているが、その他明治初頭十九の国内外博覧会に出品した人物については前掲岡村『幕末明治

明治初期博覧会資料等にみえる萬古陶工たち（岡村）

期の桑名の萬古陶工」に百二十七人記載しているので参照とすること。

- 六 パリ万国博覧会出品及び受賞については農商務省庶務局版『巴璃萬國大博覽會日本出品品評抄譯』（明治十七年）によると「名誉賞状 陶磁器出品人中」とあり、その次行より金牌ノ部以下県名と個人及び団体名が列挙されている。谷スミは銅牌ノ部に清水六兵衛や高橋道八らと共に並び、銅牌の次に「賞状ノ部」に高木閑齊及び森與五左衛門の名が記載されているが開之助、忠左衛門、堀の名はない。

- 七 クリストファー・ドレッサー (Christopher Dresser) は帰国後日本での体験を著書『JAPAN its architecture, art, and art manufactures』（訳題『日本―その建築、美術、工芸』：一八八二）にまとめている。主要な陶芸家の五人とは塚山、薮、孫七、忠左衛門、堀のこと。ドレッサーの視察に同行した石田為武はその報告書『英国ドクトルドレッセル同行報告書』（明治十年）の中で萬古焼を取り上げているが、主な人物として薮と孫七、忠左衛門の三人しか挙げていない。

- 八 前掲岡村「明治期の桑名の萬古陶工」参照。

- 九 詳細は日比義也『米華と半助と』付録『四日市萬古覚書』参照。

- 十 明治十四解説による。しかし開窯には諸本で若干の揺れがある。『日本陶工傳』には「末永村にて文久元年開業」、フランシス・プリンクリー (Francis Brinkley) 『Japan: Its History Arts and Literature, Volume III Ceramic Art』（訳題『日本の陶器』：一九〇二）では一八四五（弘化二）年、『府県陶器沿革陶工伝統誌』には「末永村に嘉永に起こり」、『本朝陶磁器工傳』（明治十九年）によると「万延元（一八六〇）年自己の実験にて開業」と記述されている。

- 十一 ドレッサー『日本―その建築、美術、美術工芸』参照。川村範子『クリストファー・ドレッサーと「日本」―明治初期の陶磁器業―』（近代陶磁九号）にも該当部分を「いやなピンク」と訳している。『三重県史通史編近現代Ⅰ』（平成二十七年）に「ドレッサーは恐らく有節万古の中でも品格を感じさせる腥膻脂釉の製品に魅了されたと推測される（六六二頁）」とある

が根拠が明確でないため何をもつての論考か全く不明。

十二 岡村「モースコレクションのなかの萬古焼」(四日市市立博物館紀要第十二号) 論考で、「ドレッサーの歩いた時代にはまだ四日市萬古は開花前であつたと思われる。」と記述していたが、四日市の萬古焼は明治初頭より国内外で高い評価を受けていたことが本論でも明らかであり、考察を本論の通り訂正する。

十三 第二回内国博では又助が同業者小川半助と共に会場内で売店を出していたことが行方庄助『川村萬古翁傳』(大正八年)に書かれている。間口三間、奥行二間のところで開期中起臥していたらしい。半助と又助夫妻と食事に行った際の微笑ましいエピソードも記載されている。

十四 エドワード・S・モース (Edward S. Morse) 『Catalogue of the Morse Collection of Japanese Pottery』(一九〇一)の訳題。原著の伊勢のやきもの部分についての訳文(半助部分含む)は前掲岡村『モースコレクションのなかの萬古焼』参照。

十五 前掲岡村『モースコレクションのなかの萬古焼』において「伊藤嘉助」としていたが県資料における当人署名より、バリ万博に出品したのは「伊達嘉助」であることが判明したので訂正する。

十六 近藤賢蔵編『孤野町史』(昭和十五年)及び林尚澄『孤山焼き』について(エスコラピオス学園海星中・高等学校研究論稿第十九号)参照。

十七 フランクスについては註四参照。

十八 日本で褒状を受賞したのは十二人。閑齊が受けた褒状は実見できていないが、同時に受賞した森與五左衛門の賞状は森家に伝わっていたので文面が分る(『復興萬古・有節が求めたもの』朝日町歴史博物館開館一周年記念特別展図録・平成十年)。それによると、「une mention honorable」とあり、褒状というのは「選外佳作」であつたことが分る。

十九 モース著『Japan Day by Day』(訳題『日本その日その日』)に記述がある。半助には半日ほど話を聞いたことが記述してあ

明治初期博覧会資料等にみえる萬古陶工たち(岡村)

り、このレポートがあると当時の萬古焼、小川半助の詳細が明快になると思われる。

二十 ジェイムズ・ボウズ (James L. Bowes) 『Keramic art of Japan』(一八七五) 参照。

二十一 海蔵地区社会教育委員会編『萬古焼史資料』(昭和二十八年) 参照。

二十二 三重県史編さんグループ『発見―三重の歴史』(平成十八年) 参照。

二十三 元七が使った「ひでの」印と、桂助が使った「日出野」印が、志氏野陶器となんらかの関係があったと思われる。

参考文献

萬古陶芸の歴史と技法／四日市萬古焼史／海蔵小誌／観古図説／日本陶工傳／三重県行政文書博覧会関係資料／国立国会図書館所蔵博覧会関係資料／陶窯類纂／本朝陶磁器工傳／明治期万国博覧会美術品出品目録／英国ドクトルドレッセル同行報告書／四日市の文化財／温知図録／米華と半助と／府県陶器沿革陶工伝統誌／川村萬古翁傳／菰野町史／「菰山焼き」について／茶譜茶話聞書空也堂来由／『復興萬古―有節が求めたもの―』／東京名家繁盛図録／萬古焼史資料／発見！三重の歴史／改訂版萬古不易四日市萬古焼のあゆみ／列伝三重県陶芸先覚志

(おかむら ともいちろう・元四日市市立博物館学芸員)